

【調査報告】

北海道旭川市の精神保健医療福祉の形成過程における 精神保健ソーシャルワークの所在

A Study on Position of Mental Health Social Work in the Formative Process of
Mental Health and Welfare Services in Asahikawa City, Hokkaido

永井 順子（北星学園大学）

松浦 智和（名寄市立大学）

要旨：

本稿は、1950年代～1980年代に旭川市において精神保健医療福祉の体制が整備されていく過程を明らかにし、精神保健ソーシャルワーク（以下、精神保健SW）の所在を検討することを目的とした。方法として文献等の検討とインタビュー調査に基づく歴史研究を実施した。その結果、旭川市では各精神病院医師の組織的な取り組みや道立旭川保健所保健婦の働きがあり、1970年代以降、家族会や当事者活動が開花したことが明らかになった。そのなかで、準公立の総合病院のソーシャルワーカーの業務の一部として精神保健SWの萌芽が見られた一方で、郊外の私立精神病院においては、「作業療法助手」によるソーシャルワーク的实践が積み重ねられた結果、PSW（精神科ソーシャルワーカー）という職種が院内に位置づいたことが確認された。また、その過程におけるPSWとしてのアイデンティティの形成は、同種のアイデンティティを持つ者の存在によって促進されたことが示唆された。

Keywords：北海道旭川市，精神保健医療福祉の歴史，精神保健ソーシャルワーク，精神科ソーシャルワーカー

I 研究の背景と目的

1964年の日本精神保健福祉士協会の設立から50年以上が経過し、日本における精神保健医療福祉領域のソーシャルワーク（以下、「精神保健SW」と記す）は一定の歴史を重ねてきた。しかし、その全国史についても豊富とはいえないが、地域の独自の精神保健SWの歴史については、さらに体系的な研究は乏しい。北海道においては、十勝や浦河など全国的にみても優れた活動を有しながら学術研究は少なく、各種史料・資料も散逸した状態であることが推察された。

そこで筆者らは、広域である北海道について、第三次医療圏である道南、道央、道北、オホーツク、十勝、釧路・根室の6区域に分け、区域ごとの精神保健SWの歴史を調査、分析、記述することを目的とした研究を実施した。研究の過程では、6区域のうちにはその内部にそれぞれ特徴を異にする活動区域を含む箇所があり、6区域単位で精神保健SWの歴史を語ることに

に難しさのあることが明らかになってきた。たとえば道央は札幌市を含み、さらに、二次医療圏区分でいう後志（小樽市など）、西胆振（室蘭市、登別市など）、東胆振（苫小牧市など）、日高（浦河町など）に異なる実践が含まれることは研究開始当初から予想していたが、研究の結果、それぞれの特徴が一層明らかになってきている。また、道北では、上川中部（旭川市など）、上川北部（名寄市など）、宗谷（稚内市など）に特筆すべき精神保健SWの展開があり、それぞれ個別の記述を残す価値があると考えられる。本稿では、道北上川中部の旭川市に焦点をあてる。

旭川市では1955年に旭川赤十字病院に精神神経科が開設し、ほどなく4つの私立精神病院が設立、1963年に市立病院に精神病棟が完成した。本稿では、1950年代～1980年代に旭川市において精神保健医療福祉の体制が整備されていく過程を明らかにし、精神保健SWの所在を検討することを目的とする。

II. 研究方法と倫理的配慮

旭川市の精神保健医療福祉の形成過程に関わる文献、史料・資料収集と検討を行う歴史研究を実施した。また、旭川圭泉会病院の先駆的 PSW (精神科ソーシャルワーカー)^{注1}である乳井雅子氏 (現・上川相談支援センターねっと顧問、元・旭川圭泉会病院社会復帰・地域連携部部長) に自身の活動の履歴等に関するインタビュー調査を実施した (2019 年 6 月 17 日)。さらに、旭川厚生病院で長くソーシャルワーカー (以下、SWer) として勤務した中澤香織氏 (現・札幌大谷大学短期大学部教授) に情報収集のためのインタビュー調査を実施した (2020 年 1 月 10 日)。実施に際しては研究の趣旨と倫理的配慮等について書面にて説明を行い、対象者の同意を得た上で IC レコーダーにて録音した。インタビューで得られた内容については、一つの歴史的証言として、他の文献、資料・史料と照合しながら本研究の参考とした。なお、本研究は、北星学園大学研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得て実施した (19-研倫 4 号)。

III. 研究結果

1. 旭川市における精神保健医療福祉の草創期の概観

旭川市の精神保健医療の前史としては、1925 年に市立精神病者監置所 (30 坪) が旭川救護院に付設されたことがあげられる。その後道路建設の妨げになるなどの事情があり、1941 年には救護院から分離して、市立総合病院予定地の隣接地に移築された。この監置所が、1950 年の精神衛生法の公布により精神病舎に転じて、伝染病隔離病舎であった市立緑橋病院の裏側に建築された (旭川市史編集委員会 1959 : 564)。それに先駆けて 1941 年には、北海道大学精神医学教室 2 期生の相川正義により相川病院が開設しており (隣接する師範学校からの強い反対があり、建設には苦労したという) (北海道精神病院協会 1998 : 132)、戦後まもなくの旭川市の精神科医療は同院が主に担っていた^{注2}。なお、1937 年には北海道内初の保健所として旭川保健所が設置されたが (旭川市医師会 1980 : 404)、精神衛生業務の実施は 1965 年の精神衛生法改正以後のことであった。

その後、1955 年には旭川赤十字病院に精神神経科

(100 床) が開設 (全国赤十字病院で最初の精神神経科) (旭川赤十字病院 1986 : 44)、1956 年には 1923 年に佐竹清秀が内科と小児科で開設した佐竹病院に佐竹郁夫が勤務し、精神科を開始したと思われる (辻 1960 : 113、佐竹 1980 : 119、塚本 1988 : 4)。1957 年 5 月には直江病院 (60 床) が開設し、1961 年には佐竹、直江両病院が統合して旭川精神病院 (120 床) となった (北海道精神病院協会 1998 : 202、旭川圭泉会病院 HP)。1960 年 11 月には高橋精神神経科病院 (40 床) (北海道精神病院協会 1998 : 266、メイプル病院 HP)、1962 年 11 月には豊岡病院 (50 床) が開設され (北海道精神病院協会 1998 : 259)、1963 年 8 月に市立病院に精神棟 (100 床) が完成した (市立旭川病院開院 50 周年記念誌編集委員会 1981 : 27)。道北の名寄市、士別市、稚内市を始め北海道では、公立、準公立の精神科が私立に先駆けて設置され、その後も地域の精神科医療の中心を担っている例が多く見られるが、私立の精神病院が 1960 年代前半までに複数整備され、公立病院も含め病院間の協力体制を築いたのは旭川市の特徴である。1957 年には、相川病院の相川正義、直江病院の直江善男 (元・網走向陽ヶ丘病院)、旭川赤十字病院精神神経科の高橋順、佐竹病院の佐竹郁夫、名寄市立病院精神科の荻野武敏、士別市立病院精神神経科の塚本隆三により「道東北精神科医懇話会」が結成され、1965 年には「旭川地区の精神科医の“ゆるやかな連帯の会”」として「旭川精神医学研究会」となった (塚本 1988 : 4、旭川市医師会 1980 : 495)。同じ 1965 年には旭川精神衛生協会が発足している。

旭川精神衛生協会の設立の契機は、精神衛生法施行後、東京で行われていた「全国精神衛生大会」に因んで北海道では札幌市で行われていた「全道精神衛生大会」が、各地への普及という目的から、まずは函館市、次いで旭川市で開催するという話が出たことによるという (旭川精神衛生協会 1985 : 19)。函館では北海道で最も早く 1956 年に函館精神衛生協会が発足しており、旭川精神衛生協会は 2 番目の発足であった (北海道精神保健協会 1993)。直江善男は「旭川精神衛生協会 20 周年記念座談会」の席で、設立の理由について以下のように話している。「作ったのは啓蒙普及のほか、当時の精神病院に対して非難攻撃があって我々にも加害者意識があったものですから、その辺の

ところを少しずつ判って貰おうという形で始まったかと思います」。そして「市役所にお百度踏んで協力をお願いしたんですけど、予算のかかる話には乗ってくれない。そのとき、『保健所だけでもやりましょう』と言われたのが熊谷（太市）所長で、『それでは』ととんとん拍子に話が進んだということです」とのことで（旭川精神衛生協会 1985 : 19、（ ）内引用者補足）、実際、旭川精神衛生協会は旭川保健所を事務局として、まずは「精神衛生相談室の開設、巡回相談の実施、一般市民への精神衛生研究大会の開催、講演会への講師派遣、会報の発行」を開始した（塚本 1988 : 6）。1965年に発刊し、翌年からは年2回発行されている会報『旭川精神衛生』は同協会、および旭川市における精神保健医療福祉の展開を伝える貴重な資料である。旭川精神衛生協会の足跡については、同協会の「創立 50 周年記念誌」として編まれた『旭川精神衛生』94号に詳しいため、ここでは詳細は省くが、精神科医療関係者のみならず、関連する諸領域を巻き込み、実質的な活動を今日まで継続している。

1965年の精神衛生法の改正により、都道府県に精神衛生センターが設置されることになった際には、旭川精神衛生協会を足場に旭川市として手を挙げたが、土壇場で札幌市における設置が決まったそうである（旭川精神衛生協会 1975 : 22、塚本 1988 : 6）。このことから、旭川精神衛生協会を構成した医師たちが、狭義の精神科医療のみならず、広く地域の精神衛生に関心をもっていたことが伺える。

1965年からは旭川市内の精神病院合同で入院患者のソフトボール大会や卓球大会も開催していた（及川 1978 : 19、塚本 1976 : 14）。その背景として、「昭和 30 年頃より向精神薬の開発に伴って、生活療法（作業・レク・開放化）の活発化がはじまり、旭川市内の各病院に於てもそれぞれの病院単位で作業やレクリエーションが工夫され、活発に実施されるように」なり、「1 病院内だけの閉鎖的なレクには限界があるとして、1 歩進めた合同のレク・ソフトボール大会が実施」された」と及川（当時、旭川精神病院作業療法士）は述べている（及川 1978 : 19）。

このように 1960 年代の旭川市では、各精神病院が生活療法など当時としては先進的な精神科医療に取り組み、かつ、病院間で協力して精神衛生活動に熱心に取り組む状況があり、1970 年代以降、家族会や当事

者活動が開花していく。

本稿が対象としている旭川市の精神保健医療福祉の歴史的展開過程（1990 年代まで）における主要な出来事を表 1 の年表にまとめた（表 1）。

2. 1970 年代の精神保健医療の状況

本節では、家族会や当事者活動が開花していく背景として、1970 年代の旭川市における精神保健医療の状況を整理する。

塚本（1976）によれば、当時旭川市には「精神科をもつ公立総合病院が 3 カ所、私立精神病院が 4 カ所、私立精神科診療所が 1 カ所あり、全精神科病床数は 853 床であるが、その診療圏は、旭川市を中心とした道立旭川保健所管内 1 市 8 町（人口 38 万）が主なものであり、これに精神病床のない隣接する富良野保健所管内（人口 58 万）と道北地区より流入してくる患者が加わっている」状況であった。人口万対病床数は 1974 年末で全道が 31 床超に対し旭川保健所管内は 22 床であり、1975 年 12 月 1 日現在の病床利用率は 109%であるが、精神科医療施設 8 ヶ所に勤務する精神科専門医は常勤 14 名とパート 1 名の計 15 名で、医師 1 人あたり入院患者約 57 名と、全道平均 81 名に比べ恵まれた状況にあることも指摘されている（塚本 1976 : 13）。なお、伊東ら（1977）が 1974 年末の保健所の資料に基づいて作成した「医療施設の地域別在住者取扱状況（通院・入院を含む）」によれば、旭川医療圏（旭川保健所管内と富良野保健所管内）の通入院者総数は 2,867 名で、在住地域は旭川が 81.9%、富良野が 5.0%、北空知の深川が 3.0%、道北の士別と稚内がそれぞれ 2.4%と 1.5%となっている（伊東ら 1977 : 64）。

表1. 旭川市の精神保健医療福祉の歴史的展開過程

年	月	出来事
1925年	12月	市立精神病患者監置所設置 → 1950年市立旭川病院精神病舎へ
1937年	4月	市立旭川病院開設 (旭川市立診療所から改称)
	6月	相川正義、精神科5床開業→1941年、相川病院開設
1955年	7月	旭川赤十字病院精神神経科 (100床) 開設 (部長・高橋順)
1956年	7月	佐竹病院に佐竹郁夫勤務
1957年	5月	直江病院 (60床) 開設 (院長・直江善男)
	12月	道北精神科医懇話会結成→1965年旭川精神医学研究会に
1960年	11月	高橋精神神経科病院 (1991年～医療法人順真会メイプル病院) (40床) 開設 (院長・高橋順)
1961年	12月	旭川精神病院 (1987年～旭川圭泉会病院) (120床) 開設、直江病院閉院
1962年	11月	豊岡病院 (50床) 開設 (院長・森正義)
1963年	8月	市立病院に精神病棟 (100床) 完成 (部長・塚本隆三)
1965年	1月	旭川精神衛生協会設立→秋～「精神衛生センター」設置運動
1966年	7月	旭川厚生病院に精神科 (54床) 開設 ^{**}
		高橋精神神経科病院患者家族会、相川病院患者家族会結成
	9月	旭川精神病院患者家族会結成
	10月	市立旭川病院患者家族会結成
1967年	1月	四条診療所開設 (所長・佐竹郁夫) ^{**}
1969年	2月	旭川精神障害者家族連合会発足 (旭川精神衛生協会事業として→1970年12月独立)
	9月	旭川断酒会発足
1971年	4月	旭川市職親会で精神障害者受け入れ ^{**}
1974年	4月	保健所で断酒会会員による酒害相談開始
1976年	5月	旭川保健所社会復帰学級「ポピー学級」開設
	6月	在宅精神障害者回復者クラブ「あおぞら友の会」発足
	11月	旭川医科大学付属病院精神科神経科 (33床) 開設 (科長・森田昭之助)
1978年	4月	旭川市精神障害者入院費助成制度開始
1979年	3月	旭川精神病院ソーシャルクラブ「アップル会」発足
1979年	12月	医療法人六樹会聖台病院 (100床) 開設 (院長・藤本達哉) [*]
1980年	11月	旭川市ののちの電話開設 ^{**}
		精神障害体験者の集い「水曜会」発足→1982年4月、「さあくる・ふれんど」に改称
1983年	4月	しらかば共同作業所発足
1985年	4月	旭川連合断酒会発足
1987年	1月	丸谷病院 (2床) 開設 (医長・丸谷真知子) ^{**}
1988年	5月	旭川圭泉会病院に精神科デイケア設置
1989年	5月	コスモス共同作業所設立 ^{**}
1990年	1月	ボランティア養成講座開講→1995年7月精神保健ボランティア「ともだちの会」発足 ^{**}
1994年	12月	ななかまど共同作業所設立 ^{**}
1995年	7月	PSW組織「ふくろうの会」発足
1996年	10月	医療法人社団直江中央クリニック (現・医療法人社団直江クリニック) (院長・直江裕之) 開設 ^{**}
1998年	6月	ひだまり作業所設立 (ふくろうの会による)

筆者作成。なお出典については本文に記載の出来事については本文を参照。本文に記載のない出来事については、表中に※を付した。それぞれの出典は以下。※北海道精神病院協会1998：244、256、265、259-260、※※佐竹1980：119、※※旭川精神衛生協会2016：32-33

以上からは、病床数が全道平均よりも少なく—1976年11月には旭川医科大学付属病院精神科神経科33床が加わる（北海道精神病院協会1998：244）—、地元の患者が多いなか、医師数に恵まれていたことが、医師らが地域精神衛生活動を推進する背景となったと推察される。

さらに、道立旭川保健所は北海道で最大規模の保健所であり、機構内に精神衛生指導係が置かれて専属の職員3名が配置され、保健婦は10名であったという（塚本1976：13）。旭川保健所の保健婦であった八代紀子氏は保健所の精神衛生業務における保健婦活動を次のように振り返る。「業務の中で実質、位置づけられたのは昭和42年だったと思います。丁度私が旭川保健所に入った年で、臨時の職員が、一生懸命訪問記録カードを作成しておりました。この頃から少しずつ訪問活動に着手し、訪問の指針を作ったり、保健婦の研修会で、精神衛生関係を取りあげたりしました。又、昭和46年には市内の精神病院で実習するなど、昭和40年代には、訪問活動を中心に知識を得ることに重点が置かれていました」（八代1985）。また、1990年に旭川保健所普及課保健婦係長であった大久保洋子氏は、同所の保健婦活動25年を振り返るなかで、1966年に「保健所における精神衛生実施要領」（衛発第76号厚生省公衆衛生局長通知「保健所における精神衛生業務について」別紙「保健所における精神衛生業務運営要領」と思われる）が出され、同年の「保健婦業務計画」の中に「精神訪問の強化」があがり、実際に増えたことを紹介している。さらに昭和40年代の状況を以下のように述べている。「昭和44年～46年は旭川精神障害者家族連合会設立、旭川断酒会結成、児童問題懇話会開始等、精神衛生活動が地域の中に広がりました。保健婦も種々の地域活動に参加し、そして、訪問の強化、保健婦の精神衛生活動体系づくり等、市内の精神科医師の強力なバックアップを受けて体制を整えています。＜中略＞昭和40年代後半は精神科医師の指導、協力により病院の臨床実習、症例検討等を行ない、精神訪問活動を飛躍的に延ばしました。全道の中でも先進的な活動をしていたと思います」（大久保1990：48）。

上記のとおり、地域精神衛生活動に熱心な医師たちの組織的な取り組みがあり、また、実働を道立旭川保健所の保健婦たちが支えたことが、この時期の旭川市

の精神保健医療の特徴だった。他方で、北海道の他地域では同じ時期に保健所と病院に勤務するPSWとの連携が始まっている。たとえば、帯広では1968年から各病院の医師、PSW等と管轄市町村の保健婦等による担当者会議「精神衛生に関する事例検討会」が開催されており、1975年からは精神科医とPSWによる月1回の周辺保健所訪問診察が実施された（永井ら2019）。このようなPSWの関与した精神保健SWの展開はこの時期の旭川市では見られなかった。1960年代後半からの地域精神衛生活動においてPSWの関与がみられないのは旭川市の特徴といえる。

次に、1970年代の地域精神衛生活動の中で開花していった家族会、当事者活動について見ていく。

3. 家族会、当事者活動の状況

(1) 家族会、回復者クラブ「あおぞら友の会」

家族会の結成は1966年に始まる。7月に高橋精神神経科病院と相川病院、9月に旭川精神病院、10月に市立旭川病院で患者家族会が結成された。1968年8月には「旭川精神障害者家族連合会準備懇談会」が発足し、11月に旭川精神衛生協会事業の一つとして家族会活動が承認を得、翌年2月に「旭川精神障害者家族連合会」（以下、旭家連）が正式に結成された（旭川精神障害者家族連合会1980：15）。結成当初からスローガンとして、「私たちの3つの目標」～「1. 病気になったとき安心して治療を受けられるように（精神病の医療費の10割給付）」「2. 病気が治ったときすぐに働けるように（精神病者の雇用促進）」「3. 病気が治らぬときも暮していけるように（充実した扶養年金制度の確立）」～を掲げている（駒井1969：31）。

1970年には精神衛生協会から独立した組織となり、上記目標を達成するべく、1971年には「精神障害者に対する社会福祉制度の充実について」を市に陳情、旭川市議会で採択されている。1972年には「旭家連だより、第1号」を発行、1973年から医療費補助の陳情活動を行い、1978年4月から旭川市精神障害者入院費助成制度（月1万円）を開始した（旭川精神障害者家族連合会1980：15-18。武田2016：10）。1976年6月には、長い療養生活のために孤立しがちな精神障害回復者の交流の場として回復者クラブ「あおぞら友の会」の開催を呼びかけた。発足式には家族、当事者を合わせ、約100名が参加したという（駒井1976：13）。

「あおぞら友の会」は、「スポーツ、ダンス、ハイキング、社会見学、趣味のサークルをとおして、仲間作りに主眼をおいた集まり」であり、ボランティアとして「医師1名、病院職員2名（ケースワーカー1名、臨床心理員1名）、その他2名」のほか、4病院にある家族会から当番を決めて2名ずつ毎回支援を行っていたという。当初は月1回で家族が付き添ってくる人が多かったが、1977年5月から月3回になるとともに家族の付き添いが減り、1978年2月から毎週火曜日に開催し、会員だけの参加が大半になったと報告されている（菅原1979:27）。

1983年には「社会復帰に向けたものが欲しい」とする家族会の切実な要望から、医療機関、行政も協力し、全道で札幌市、江別市に次ぐ3番目の作業所として「旭川しらかば共同作業所」が発足した。手工芸品製作やレクリエーションを中心に週3日（月水金）の活動であったという（武田2016:10、堤2016:18-19）^{注3}。

(2)断酒会

旭川断酒会は1969年9月に結成された。相川病院の断酒会活動が発展したものであるという。当時、北海道内に断酒会は室蘭市と札幌市にしか存在せず、3番目の結成（会員31名）であった。発足当時は相川病院の講堂で月1回活動していたが、NHKの放送で取りあげられたことから参加者が増え、月2回となったという。1970年から「おしるこ忘年会」を開催、1971年からは機関紙「あさがを」を発刊、1972年には北海道断酒連合会の全道大会を旭川で開催した。1973年には近隣の断酒会と「合同花見例会」を実施（深川、滝川、1974年から砂川も参加）、1974年中央支部が発足（その後、4支部に）、また、保健所内に当事者酒害相談員による酒害相談所を開設した（中山1980:20-21、塚本1988:8）。1977年2月には道北ブロックの研修会として「断酒学校」を国立大雪青年の家で実施、9月に「北海道大雪断酒学校」と名付け、高知県の「村松断酒学校」、島根県の「山陰断酒学校」に次ぐ日本で3番目の断酒学校となった。他方で、会員数の増加や運営の仕方への意見の相違などがあり、1978年には「旭川断酒新生会」が分裂して誕生、1985年には「旭川北断酒会」「旭川大雪断酒新生会」も発足し、各断酒会の連携交流のため「旭川連合断酒会」が発足、同時に単身者の集いである「旭川連合青年部」が誕生、翌

年に女性会員の会として「アイリスの会」が発足した。以降も継続的に活動している（相川1989、南2016）。

(3)社会復帰学級「ポピー学級」

1975年、旭川保健所が精神障害者の社会復帰の促進をはかるための実施保健所となり、家族会を始めとする関係者の期待が高まった。しかし保健所の体制は弱く、予算も精神衛生事業総額80万円のみというなかで始められたのが社会復帰学級だった（駒井1976:14）。開始は1976年5月、月2回、5ヶ月間を1コースとし、目的は「まず体力づくりを主に、レクリエーション、話し合いなどを通して生活の意欲を持たせる。仲間と一緒に作る喜びを得る。そうして協調性、社会性向上をめざし、自信をもって回復への努力をするように援助を行うこと」であった。対象は、趣旨に賛同する参加希望者で、「イ. 主治医の許可のある人（各市内の病院より候補者を推せんして貰う）ロ. 家族の協力の得られる人（会場が遠距離になるため、一人で来れるまで家族の同伴可能な人）ハ. 今回は20~30才までの女性とした。ニ. 人員は10名程度。」という条件がついた。会場は保健所ではなく、神楽福祉センターを借用した。第1回生は6名であったそうである。1回めに「友達づくりができるように、リボンフラワーを作った」ことから、その花の名前を学級名にしたそうだ。その後のプログラムは、料理、七宝焼、レース編み、レコードを持ち寄ってのコンサートであった。学級の効果として、家庭でも料理を作った、学級生同士のグループができた等が報告されている（藤田1977）。

1976年6月には回復者クラブ「あおぞら友の会」が発足し、同じ会場で開催していた。当初は「車の両輪のように歩んで」いたそうだが、内容が類似しているためにそれぞれが位置づけを悩むことになり、1984年4月には各施設の代表者が集まり、企画の見直しをはかったそうである（八代1985）。

1980年11月には「あおぞら友の会の夜版みたいな形で」（八代1985:47）、回復し就労している人たちを中心とした集いとして「水曜会」が発足。これは塚本（1990）によれば「旭川保健所の森本玲子氏の努力で誕生」したという（塚本1990:22）。森本氏については、本研究で実施した乳井氏へのインタビューにおいて、乳井氏が入職した1973年頃に旭川精神病院の心

理士であったこと、1～2年後には北海道の機関に転職したことを確認した。よって1980年までに今度は旭川保健所に異動してきたと思われた。また、1979年から旭川厚生病院のSWerだった中澤香織氏によれば、「水曜会」の発足に際しては森本氏から中澤氏と当時旭川赤十字病院のSWerであった大坂英治氏に声がかかり、3人で開始したとのことだった。しかし、1年ほどして中澤氏が家庭の事情により活動に参加できなくなり、その後、森本氏が転出したことによって一時中断したが、1982年4月より名称を「さあくる・ふれんど」に変えて再発足、事務局を保健所に置いた（浜口1982、八代1985）。会員は「患者グループ42名、支援グループ27名」の計69名であったという。プログラムを決めず、交流を楽しむ会として定着した（浜口1982）。

以上の諸活動は、旭川精神衛生協会の機関紙に紹介されていることに鑑みると、同協会のバックアップを得たものであったと考えられる。また、それらは旭川保健所、相川病院、神楽福祉センターと、旭川駅に比較的近い市街地を拠点としていた。一方、そこからは離れた東旭川町の旭川精神病院では、独自に精神保健SWが育まれた。その主な担い手が今回インタビュー調査を実施した乳井氏である。そこで、以下では4項で、乳井氏へのインタビュー結果から旭川精神病院における精神保健SWの展開を辿り、5項で乳井氏と中澤氏へのインタビュー調査をもとに旭川市の精神保健SWの動向を確認する。

4. 旭川精神病院における精神保健SWの展開

(1) 旭川精神病院における作業療法、患者会

「アップル会」の運営

乳井氏は1973年に旭川精神病院に入職、当初「作業療法助手」として勤務したとのことであった。「福祉職というポジション」がなく、「作業療法士の部下ということで、その当時はOT室とっていましたが、作業療法のお部屋に配属になったというような状況」だったという。この作業療法士は先述した及川氏である。当時の直江善男院長が乳井氏の学ぶ短期大学（幼児教育を学ぶ課程であった）で教鞭をとっていたことも就職の縁となったそうで、「将来的には福祉職を目指して採用という枠が、まあ初めてできたというか、そういうお気持ちを先生が持っていました」と述

べており、もともとSWerへの志向があった乳井氏は就職後、通信教育で社会福祉を学んだそうである。

当時の作業療法（以下、OT）の内容であるが、「午前中は作業療法をやって、午後からレクリエーションをやるというような、大きく二つのプログラムだった」ようだ。「作業療法は1年中を通してできる<中略>木彫りの熊を、ワックスをつけて磨くっていう作業があったんですよ」とのこと、その作業は「民芸品屋さんから下請けでお仕事いただいて、何時間かかけて磨き上げて、1個につきいくらかの磨き代、みたいなかたちで、やってみましたね」という。これは及川氏や院長が知り合いの民芸品店から仕事をきていたのではないかとということで、作業に参加している患者数は22～23人くらいであったという。これらの作業で得られた“工賃”であるが、月に1回の茶話会やジギスカン・パーティなどに活用され、患者たちの楽しみとなっていたそうである。また、院外作業も乳井氏の入職以前から「作業療法の一環で<中略>東旭川の中にある、養豚所とか、木工所とか、そういうところと協力をして、院外作業っていうかたちで」既に開始していたとのことだった。

レクリエーションについては、郊外の精神病院ゆへの広大な敷地を活用したソフトボールやテニス、屋内では卓球や百人一首なども行われていた。「全てのレクがそうなんですけど、当然、自分のいる機関でもやりますけど、それを、他の、旭川市内のところと大会をやるんです」「ですので、目標があるので、バレーにしてもソフトボールにしても卓球にしても、結構、うん、頑張ってる（笑）」と乳井氏は述べていた。なお、作業療法士がいたところは旭川精神病院だけで、他の機関は看護師が担当していたそうである。また、合同レクを実施するために各医療機関の担当者の会議も開催され、「旭川精神医学研究会」が活動費の支援をしていたのではないかとのことだった（旭川市医師会史編集委員会2000：365にもその旨の記載あり）。

1979年に旭川精神病院では、「アップル会」という患者会が誕生している（佐々木1985：15に記載あり）。この会について乳井氏は以下のように述べる。「先代の院長（直江善男氏：引用者補足）が75年くらいから、患者さんを外に出そうっていう動きがあったんですよ、病院の中で。出て行けそうな人、ご家族が受け入れてくれそうな人を、院長がそういうふう判断

した患者さんについては、とにかくその、一度家に戻って、そこから病院に通ってきなさいと。で、僕のスクラップを手伝って、とか。いろんなその、役割を持たせて、何かこう、孤立させないっていうようなことをやってらした先生だったんですね。その結果、「患者の集まり」がで始め、「その後に入ってきた医者も結構積極的にやってくださる先生で。あの一、夜みんなで食事に行きましょうみたいなこともやり始めたんですよ。で、外にいる、退院している患者さんは、夜出かけるのも結構大変だと思うんですけど、入院している患者さんで、退院予備軍みたいなところを、一緒に外出ってかたちで外に連れて行って、夜食事をして帰ってきましょう、みたいなことをやっているなかで、患者さんたちの集まりがとっても強くなっていった」という。そして「みんなの会の名前がほしいね、っていった時に、患者さんの中から、そのメンバーの中から、あの『アップル会』っていうのがある、っていう名前がポツと出たんですね。で、そうだね、そうだね、みたいな感じになって、その『アップル会』『アップル・ファミリー』みたいな、ファミリーっていうことばにとっても患者さんが、こう惹かれるところがあつたりして、『アップル会』っていう会ができて、『アップル・ファミリー』っていう冊子ができるみたいなかたちで、で、それも、みんな患者さんたちが記事を集めて、こう自分たちで書いて、なんかこうお配りするみたいな感じで、始めて、そのアップル会っていうのは、そういうみなさん、患者さんたちが自主的に集まって、やってたものですね」とのことだった。

夜の食事会については市内の中心部のビルの地下のお店で行っていったそうだ。「そこは結構理解を示して、当然、予約するときに、こちらの連絡先も言いますから、<中略>精神科の患者さんたちの集まりだっているのがわかりますよね。それでも非常になんか理解を示してくれて、だからどうのっていうのはなかった」「それこそ、在宅の人も来ると40名くらいになることもありましたね」と当時の思い出を語っていた。一方で、夜に外出して帰宅することを見守るために、同伴する病院スタッフを厚くしてもらいながらも、「すごい疲れしましたが(笑)」と述べていた。このような活動は乳井氏にとっても挑戦であったといえよう。そのなかで乳井氏はOT室の所属でありながら、SWerとしての自身を意識し始めたようだ。それは乳

井氏が、患者と多くの時間を過ごすなかで、患者の主体性や自己決定を尊重し、生活を豊かにするというソーシャルワークの必要性を感じ、その理念に重きを置いた支援に自負を持ったということであるようにインタビュー結果から思われた。そして、1980年頃に及川氏が十勝療養所に移り、院内で乳井氏は「作業療法助手」から「ワーカー」へと位置づけが変化していったという。

(2) 旭川圭泉会病院デイケアの誕生、「相談室」の立ち上げ

1987年に旭川精神病院は旭川圭泉会病院となり、1988年にデイケアを立ち上げている。その背景には、「それくらいずっと患者さん、通ってきていたりだとか、それはまあ再診料しか取れない状態で、あの一、患者さんとの関係を、患者さんが治療を中断しない関係を作るってことをやってきて、っていうのがありましたね」と、実績のあつたことが大きく作用した。つまり、直江善男院長が在宅の患者の行き場や役割を作りたいと試みたことから、患者の自主組織であるアップル会が生まれ、そこに乳井氏が福祉的視点を多分に含んだ支援を実施してきたことが大きかったと思われる。そして、「デイケアを立ち上げてみたいなことになってくると、病棟兼OT兼務はちょっとできないよね、感じにもなって」と、乳井氏がデイケアの立ち上げに際してはコアスタッフの1人として活躍し、PSWを名乗るようになった。乳井氏は1985年4月～1986年5月の間で日本PSW協会北海道支部の会員にもなっている(日本精神医学ソーシャルワーカー協会北海道支部1986:16)。

なお、当時旭川圭泉会病院副院長であった猪俣(1988)も、「当病院では社会復帰活動として、家族会活動、回復者クラブ、就労援助、アパート捜しなどを行ってきたが、デイ・ケア活動は昭和53年1月から開始した。病院内の設備を利用して、工芸・美術・喫茶・料理などを行っていた。昭和55年頃からは、退院患者の病院周辺での単身生活の増加に伴って、デイ・ケア活動も活発化し、ほぼ20～30名の患者が通院していた」とし、1986年に病院の新改築が行われたことに伴ってデイケア専用施設の建築が始まり、専従の職員が定められたこと、1987年6月には建物完成し、病院とは独立した活動が開始したこと、1988年5月

に厚生省（当時）の認可を受け病院附属型のデイケア施設として全道 6 番目、道北では最初に正式発足したことを記述している（猪俣 1988 : 33）。

インタビュー結果に戻るが、1990 年には乳井氏は自ら願い出て、院内に「相談室」を作るにいたる。デイケアのスタッフが充実する一方で、認知症の患者が増えてきたことから相談窓口の必要性を訴え、病院経営の中核を担う事務長にも認められたことが大きかったという。2000 年代には旭川圭泉会病院の関連施設が拡大していくことに並行して、相談室の PSW も増えていったとのことだった。現在、この相談室は「社会復帰・地域医療連携部」に位置づいており、10 名以上の PSW が所属している。医局や事務部門とは異なる一部署としてソーシャルワーク部門があることは旭川圭泉会病院の特徴だが、これは他ならぬ乳井氏の功績であった。

5. 旭川市内の精神保健 SW の動向

まず、精神保健 SW に限らず SWer という意味では、旭川市で最古は国立療養所旭川病院（現・独立行政法人国立病院機構旭川医療センター）にいた亀谷廣氏であり、『北海道医療社会事業協会 30 周年記念誌』

（30 周年記念誌編集委員会 1987 : 3）に亀谷氏の活動の記載あり一、次いで旭川赤十字病院の浜口英子氏であると思われた。『旭川赤十字病院 70 周年記念誌』の記載から、浜口英子氏の入職は 1960 年、そして 1978 年に二人目の SWer（大坂英治氏と思われる）が採用されている（旭川赤十字病院 1986 : 159、368）。旭川厚生病院には 1973 年に SWer として中平大吾氏がいたことが確認できた（中平 1973）。その後任として竹田芳之氏が入職し、1979 年の中澤氏の入職で 2 人体制になった。旭川赤十字病院、旭川厚生病院ともに精神科があり、中澤氏によれば、SWer は精神科の業務も担当し、退院支援（アパート探しや退院後の訪問など）も行っていったという。実際、中澤氏は入職時から日本 PSW 協会北海道支部の会員であったが、PSW に特化したアイデンティティを有しておらず、SWer として自身を認識していたとのことだった。

この当時旭川市立病院には SWer はおらず、乳井氏によれば「公立とかになると、ま、その（笑）、規格外じゃないですけど、なんていうんでしょう、医者、ナース、事務員以外の、そういう仕事は、採用できない

から、個人病院だから置けるんだわ、いいね」と旭川市立病院の塚本医師から聞いていたそうである。

1987 年の社会福祉士国家資格化の前後には、上記のほかに PSW として、高橋精神神経科病院（現・メイプル病院）に栗野（後に奥村）明子氏、相川病院に「マスダ氏」がおり、そして、1990 年代に入ると旭川市立病院にも相談室が設けられ、市役所の生活保護課から長田和敏氏が異動してソーシャルワーク業務に従事したという。

乳井氏によれば、この頃から「PSW がこう、あの点在してくると、ちょっとこんなことで困ってるのよ、っていう横の連絡がとつてもつくようになった」そうである。さらに、「なんととっても、あとはあの一、P の、精神保健福祉士の資格化がその十年後に出ますから、そしたら、ふふふ、もうみんな勉強する、あはは（笑）なおさら集まる、みたいな」とのことで、1995 年には乳井氏が名づけ親となり、旭川市内の PSW の集まりである「ふくろうの会」が発足している（奥村 1996 : 38 に記載あり）。

市立病院の長田氏の協力で「ふくろうの会」は、市街地に患者の集う場所として「喫茶ひだまり」をつくり、それが 1998 年に「ひだまり作業所」へと発展していくことになる。このように PSW の横のつながりは、それぞれの機関内業務のための連絡から始まり、これを越えた地域の社会資源の開拓という成果も生み出したのである。

なお、この頃には日本 PSW 協会北海道支部内においても乳井氏は、旭川地区の PSW を代表するような役割を担っていた。入会した初期の頃は「組織部長」のような役割で名簿作成などに携わっていたそうだが、1990 年代には役員、2000 年代には常任理事も務めた。このような経過のなかで乳井氏は、所属機関内のみならず旭川市及び北海道内の専門職集団においても PSW を自認し、また他者からも PSW として認知されていたといえよう。

IV 小括：1960～1980 年代の旭川市における精神保健 SW の所在

以上に見てきたように、1960～70 年代の旭川市では、地域精神衛生活動に熱心な医師たちの組織的な取り組みがあり、実働を道立旭川保健所の保健婦たちが

支え、家族会、回復者クラブや断酒会、社会復帰学級などの活動が展開されていた。その時代にはSWerの数は少なく、その必要性も十分に認められていたとはいえない。しかし、1970年代後半からは旭川赤十字病院や旭川厚生病院ではSWerが精神科の業務も担い、退院支援等を行っており、1980年の「水曜会」の発足も担った。このことは旭川市における精神保健SWの萌芽と位置づけることができると思われた。また、旭川精神病院では、「作業療法助手」として入職した乳井氏が、患者会活動を支えるなかで「福祉職」としての意識を持ち続け、全道でも早期に病院附属型のデイケアを誕生させることに貢献した。その過程で乳井氏はPSWとしてのアイデンティティを形成していったが、それを支えたのは、自らの「福祉職」への志向、福祉的視点を必要とする患者の存在に基づく活動、院内での評価、そして、旭川市内や北海道内で同じくSWerとして活動する者の存在であったと考える。とりわけ、社会福祉士、精神保健福祉士の国家資格化という出来事は、専門職集団としての仲間の存在を意識させ、病院における医療専門職とは異なる福祉専門職としてのアイデンティティの醸成に役立ったことが指摘できよう。

旭川市の精神保健医療福祉の形成過程における精神保健SWの所在を検討する本稿の研究からの示唆として以下の3点をあげる。1点めに、1960年代以降の精神科医や保健所保健婦による精神衛生活動は、精神保健SWが生まれる土壌として前史的な意味をもった。精神衛生活動それ自体がソーシャルワーク的であると評価することもできるが、そこにソーシャルワークの価値や理念が存在していたわけではなく、患者の社会復帰を志向する精神衛生活動がその後の精神保健SWの展開の土壌となったとすることが妥当と考える。2点めに、旭川市では準公立の総合病院に早くからSWerが採用され、ソーシャルワーク業務の一部として早期に精神保健SWを担っていたが、私立精神病院においては先にソーシャルワーク的实践が積み重ねられ、その結果PSWという職種が院内に位置づいた。このことから、機関の種別ごとに精神保健SWの展開を迫る必要性が改めて確認された。3点目に、精神保健SWの担い手のPSWとしてのアイデンティティの形成は、同種のアイデンティティを持つ者の存在によって促進された。この点は乳井氏へのインタビュー結

果から示唆されたことだが、旭川市内や北海道内で同種の働きをするSWerの存在は一種の“鏡”であり、国家資格化以前にPSWとしてのアイデンティティを獲得することに役立っていた。これは、専門職がその定義からして専門職集団の組織化を必要とすることも合致していよう。

本稿では旭川市の精神保健医療福祉の形成過程を明らかにすることを目的とし、1950～80年代を対象としたため、旭川市の精神保健SWの展開の十分な検討には至っていない。1990年代以降の展開については継続して調査を実施する。

注

注1 1964年に発足した日本精神保健福祉士協会は当時、日本精神医学ソーシャルワーカー協会という名称であり、PSW (psychiatric social workerの頭文字)は「精神医学ソーシャルワーカー」の略称であったが、「精神科ソーシャルワーカー」と称されることもあり、また1997年の精神保健福祉士の国家資格後は主に精神保健福祉士を指す。本稿は国家資格化以前の年代を対象としているため、主に「精神科ソーシャルワーカー」の意味でPSWを用いた。

注2 『旭川市史』では精神衛生法の発布を昭和23年と記載(誤りと思われる)し、「昭和23年度精神病患者調」として市立精神病院に男:3名、相川精神病院に男:延べ712人、女:延べ341人の患者がいたことを記している(旭川市史編集委員会1959:564-565)。

注3 旭川しらかば共同作業所の発足にいたる過程では、市立病院の塚本隆三医師を中心として旭川市に「精神衛生社会生活適応施設」等の社会復帰施設を設置しようとする運動があったことを、旭川しらかば共同作業所の堤久男理事長からご教示いただいたが、これについては別稿を設けたいと考える。

謝辞

長時間にわたるインタビューに快く応じてくださった乳井雅子氏、中澤香織氏、貴重な情報提供をくださった堤久男氏、資料の閲覧・複写にご協力くださった旭川市中央図書館の職員の皆様に、心よりお礼申し上げます。

附記

本稿は、2017～2019 年度科学研究費助成事業「北海道における精神保健ソーシャルワークの歴史記録と教育コンテンツの構築」（課題番号：17K04230）の成果の一部である。

文献

相川正志（1989）「旭川における断酒会活動 20 年」『旭川精神衛生』49, 15 - 22.

旭川圭泉会病院 HP

<https://www.keisenkai.or.jp/history> (2020.1.15)

旭川精神衛生協会（1975）「座談会『この 10 年をふりかえって』」『旭川精神衛生』21, 19 - 27.

旭川精神衛生協会（1985）「旭川精神衛生協会 20 周年座談会 話題 成人式を迎えた協会一より確かな歩みを求めて一」『旭川精神衛生』41, 17 - 28.

旭川精神衛生協会（2016）「旭川精神衛生協会 50 年のあゆみ」『旭川精神衛生』94, 32 - 33.

旭川精神障害者家族連合会（1980）『旭川精神障害者家族連合会創立 10 周年記念誌』

旭川赤十字病院（1986）『創立 70 周年記念誌』旭川赤十字病院

旭川市医師会（1980）『旭川市医師会史（Ⅱ）』旭川市医師会

旭川市医師会史編集委員会（2000）『旭川市医師会史（Ⅲ）』旭川市医師会

旭川市史編集委員会（1959）『旭川市史 第二巻』旭川市役所

藤田恵子（1977）「旭川保健所で実施している社会復帰学級」『旭川精神衛生』24, 8 - 10.

浜口英子（1982）「さあくろふれんどー精神病との闘いの中で一」『旭川精神衛生』35, 28 - 29.

北海道精神病院協会（1998）『北海道精神病院協会史 1958 - 1998』北海道精神病院協会

北海道精神保健協会（1993）『創立 40 周年記念誌』北海道精神保健協会

猪俣光孝（1988）「旭川圭泉会デイ・ケアセンター」『旭川精神衛生』47, 33 - 35.

伊東嘉弘・佐々木敏明・樋口治子ほか（1977）「北海道における精神科医療圏について」『精神衛生センター一年報』8, 53 - 64.

駒井透（1969）「旭川精神障害者連合家族会の出発」

『旭川精神衛生』8, 30 - 31.

駒井透（1976）『『あおぞら友の会』に参加しませんか？』

『旭川精神衛生』23, 13 - 14.

メイプル病院 HP

<https://www.maple-hp.net/> (2020.1.15)

南博「現在までの精神衛生に係る活動を振り返る」『旭川精神衛生』94, 12 - 14.

永井順子・佐藤園美・橋本菊次郎ほか（2019）「北海道における精神保健ソーシャルワークの生成要因～函館、室蘭、帯広の歴史の比較検討から～」『日本精神保健福祉学会第 8 回学術研究集会プログラム要旨集』（武蔵野大学），67

中平大吾（1973）『『あなた』への手紙』『旭川精神衛生』16, 31 - 33.

中山徳松（1980）「旭川断酒会 10 年の歩み」『旭川精神衛生』30, 20 - 23.

日本精神医学ソーシャルワーカー協会北海道支部（1986）『P.S.W 支部通信』11

及川征海（1978）「旭川市内精神病院合同レクについて」『旭川精神衛生』27, 19 - 21.

奥村明子（1996）「ふくろうの会あれこれ」『旭川精神衛生』63, 38 - 39.

大久保洋子（1990）「北海道旭川保健所保健婦活動 25 年間を振り返って」『旭川精神衛生』51, 47 - 49.

30 周年記念誌編集委員会（1987）『北海道医療社会事業協会 30 周年記念誌』斉藤桂紀

佐々木敏明（1985）「北海道における精神医療の現状と社会復帰活動」『精神障害と社会復帰』5 (1), 4 - 15.

佐竹郁夫（1980）『ロータリーを巡るエッセー』佐竹著書刊行発起人会

市立旭川病院開院 50 周年記念誌編集委員会（1981）

『市立旭川病院開院 50 周年記念誌』市立旭川病院

菅原昭夫（1979）「あおぞら友の会の 3 年間」『旭川精神衛生』29, 27 - 29.

武田久子（2016）「旭家連のあゆみ」『旭川精神衛生』94, 9 - 11.

辻太郎（1960）『旭川市医師会史』旭川市医師会

塚本隆三（1976）「地方中都市（北海道旭川）の精神医療」『精神医学』18 (6), 13 - 21.

塚本隆三（1988）「旭川における精神衛生活動の展開」

『心の健康』72, 3 - 14.

塚本隆三 (1990) 「家族会との 20 年」『旭川精神衛生』
51, 20 - 24.

堤久男 (2016) 「『しらかば』 32 年のあゆみ」『旭川精
神衛生』 94, 18 - 20.

八代紀子 (1985) 「地域精神衛生と保健婦活動—私自

身の体験の中から—」『旭川精神衛生』 41,47.